［研究室だより］

環境デザイン研究室

建築・デザイン学科
工藤　卓

平成二十二年度の「環境デザイン研究室」の卒業・修了生は、学部生六名、大学院生三名のゼミ生たちであった。本研究室では、建築、デザイン、土木、造園、インテリア、ランドスケープ、都市計画といった、実学の研究分野と広く関わるハイブリッドなデザイン思考による造形を目指している。研究室に所属する学生たちの研究・設計は、生活環境の持続可能性を構想し造形によって組み立てる、すなわち環境デザインの思考から生まれる希望や生活のアイデアをどのように造形化できるか、にかかっている。

卒業研究・設計のテーマは、人間と環境の共存に思いを寄せる内容であれば、学生個人が自由に構想することにしている。そのため、ゼミ生たちが持ち寄ってくる研究テーマは現代社会の問題意識が複雑に絡むものが多い。それら個別のテーマを造形で解決するのは、自らに課した相当の研鑽が必要となる。毎年、最終発表の追い込み時期ともなると、研究室はスタディ模型で埋まり、プリンターが唸り音を発し、思い通りに進まない設計バトルが繰り返される。

研究・設計のアプローチは、文献を読み込み、関連資料を探り、体験出来ることは身を以て経験することを原則に、自分の関心を創造的な発想に導く事を奨励している。人間と生物多様性が生きつづけていく環境づくりのために、何をどのように考えて設計提案したのかがポイントである。生まれてくる造形はそれらの思考の表れである。

卒業研究の最終発表は、毎年、福岡市のアジア美術館で行われる。その後、アクロス福岡でも展示される。そこでは、徹夜が長く続いた日々の成果が発表されていく。以下にこの春のゼミ生たちの渾身の卒業研究・修士制作作品を紹介する。

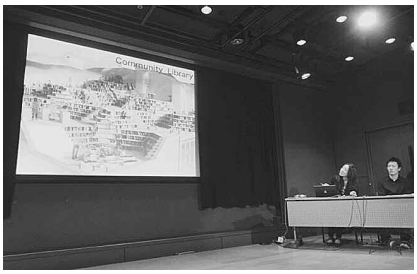

図１：アジア美術館での最終発表風景

■松村　絵里香（デザインコース）／作品：「コミュニティライブラリー
―大名につくる情報共有空間の提案―」

【設計要旨】「ライブラリー」という言葉は、図書館という意味だけでなく、〝知識の宝庫〟や〝情報源〟という意味をもつ。そこで、単純に本が詰め込まれた空間ではなく、さまざまな情報が飛び交い、人やモノ、情報と出逢うことのできる実用書によるコミュニティライブラリーをつくりたいと考えた。

本の通販サイトであるアマゾンには面白い検索方法がある。気になった本をチェックすると、「その本を買った人はこんな本も買っています。」という表示と共に、チェックした本と類似した本を検索してくれる。

今回提案するライブラリーは、このような繋がりから生まれる新たな情報や人、モノとの出逢いがネット世界ではなく、リアルな場を通して活動できる空間とする。ユーザーの多くは学生などのように、専門分野を学び、自分の力を発揮できる場を求めている人たちである。一人一人が選書家となり、オススメ本の提供や、コミュニティ活動をこの場で行うことで、情報を都市へと発信する。

実用書の中より、料理、園芸、音楽をピックアップする。これら三つは固定した場所を使い、他の三つのスペースは自由なコミュニティ活動の場とする。

敷地は大名の西通り沿いをイメージしている。福岡のサブカルチャーの中心地ともいえるこの場所からは、さまざまな出来事が繋がり、新しい情報が次々と発信されることが期待される。角地から見上げた時は、紙の

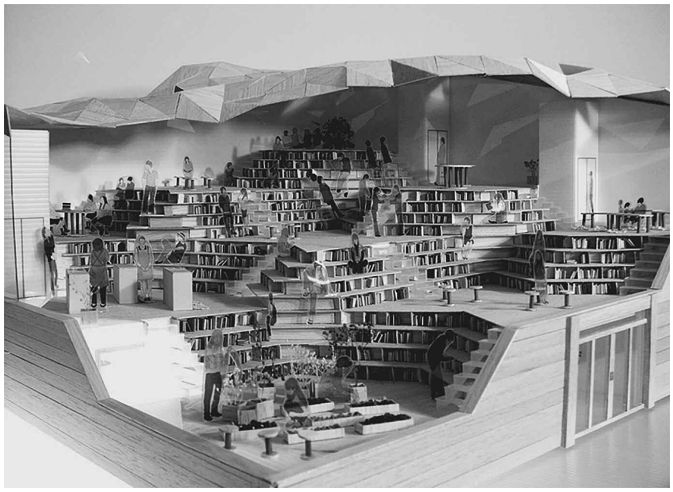

図２：コミュニティライブラリー　模型

本の圧倒的な存在感の中にコミュニティ活動で賑わう人々の様子が見られるだろう。一階には管理スペースやトイレ、書庫、ゆっくりと読書を楽しむスペースを設け上階で行われている催し情報や広告を掲示する。

【講評】電子書籍の台頭などで本離れが指摘されているが、あえて「紙の本」を都市のなかで空間化するという構想を、創造力たくましく造形化した力量は頼もしい。芸術や料理などの実用書にスポットを当てることで、紙の本の新しい読書法を発見し、その利用活動を賑わいのある都市空間のワンシーンとして発信するイメージは、ひとびとの生のふれ合いを取り戻すきっかけを作ることになろう。

■河野　公輔（デザインコース）／作品：「組立竹茶室のデザイン」

【設計要旨】現代では竹を用いた生活がなくなり始めていると感じています。竹は日本人の生活の中で、建材、箸、笊など、ありふれた材料として使用されてきました。しかし、プラスティックなどを用いた化学製品の普及などで、自然素材である竹を生かした製品もほとんど見かけなくなりました。そんな時代だからこそ、竹に直接触れて体感することが新鮮な感覚を産むのではないかと考えました。

美術館や博物館などの一室に、竹の加工技術を展示する「竹製組立茶室」を提案します。竹を使ってこんな事が出来るのかと感じてもらえれば嬉しいです。

【講評】「竹」に学び「竹」を空間化する構想である。提案された作品からは、竹の持つ有機性を造形化する苦悶を感じる。茶室から想像される日本伝統の「竹」を、現代の美術館・博物館で造形的に思いっきり暴れさせてもよかったのでは。

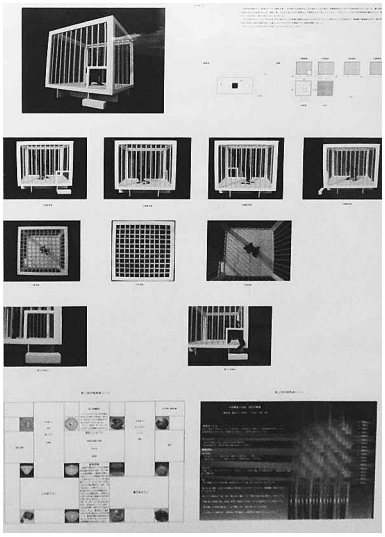

図３：竹製組立茶室プレゼパネル

■上杉　祐介（建築コース）／作品：「快適老後住宅」

【設計要旨】西神中央駅付近は、幼稚園や小学校等の教育環境が整い、ニュータウンとしての発達を遂げている。しかし、数十年の時が経った今、高齢者の方々が、ノンステップバスや、エレベーター、エスカレーターなどを利用しているのをよく目にするようになってきた。そこで、年長者とまちの人々が交流する機会を積極的に計画できるシニア向け住宅を設計することにした。

交流広場を主軸に、緑と水に親しめる住まいの環境を西神中央駅近くに建設する。年長者が利用することを想定し、緩やかで大きな円形スロープを工夫した。２つの円形住宅の間に中庭を設け、ドアを開けた時に目の前の緑を広げて見せる。ガーデニングやウォーキングも楽しめる。住戸間には寛ぎ空間を数多く配置し、会話の場をあちこちで見られるようにした。

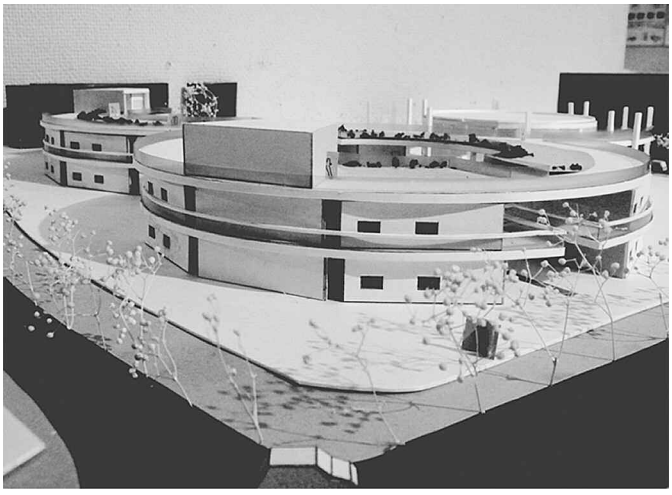

図４：円形型快適老後住宅　模型

【講評】地方の中核都市で「老後の生活空間をどのように考えるか」という切迫した住宅問題に挑戦している。このテーマでの卒業設計は、「高齢者のために、どのような新しい生活の仕組みを作り、それをどのような空間に造形したのか」という新規の提案性が問われる。それだけに、空間の造形に開放性と運動性を展開したコンセプトは的を射ている。老後の住宅をサポートする地域の実態や高齢者の生活意向をふまえたきめ細かな空間構成にもっと力を注ぐことができていれば、より有意義な提案になったことだろう。

■大塚　候平（建築コース）／作品：「人と町を繋ぐ旅泊施設」

【設計要旨】私は大分県の竹田市直入にある地元が大好きです。温泉が有名であることをいかして、少子化などによる人口減少から地元を救うべく、旅泊施設を

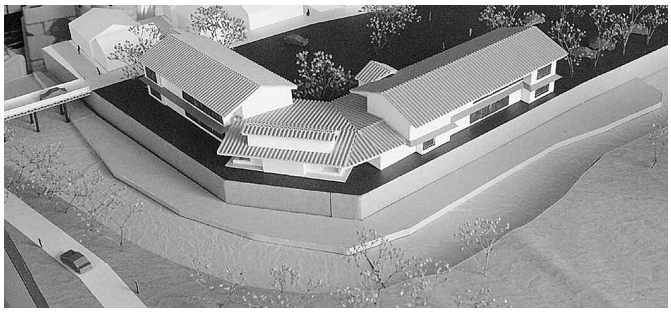

図５：町並みを背景に川筋に沿う旅泊施設　模型

設計して町に活力を与えようと考えました。

長湯には数多くの温泉館や地元でとれた野菜などが売られているおんせん市場があります。豊かな自然に囲まれ、きれいで趣のある景観も広がっています。人々は心があたたかく良い人ぞろいです。

敷地沿いには川が流れ、その向こう側に山並みが続いています。川には鴨や鯉、スッポンなどの生き物が生息しています。旅泊施設は、これらの景観要素をエントランスからも見えるように工夫し、すべての客室の窓を川側にもってきます。周辺の建物の景観にあわせて屋根は黒い瓦屋根にし、伝統的な雰囲気づくりで町にとけ込むようにします。窓には格子をはめて、くつろぎを演出します。

【講評】温泉のあるまちの風景との調和、自然との親しみ、そして人と町を繋ぐもてなしなどを、設計に表現しようとしている。町の特徴を探るまち歩きから得られた情報が、景観を優先する平面計画や伝統的な町並み景観を尊重した瓦屋根など、まちづくりに必要な建築の要件の見極めに役立っている。卒業設計としては一見地味なデザインに思われるが、実はこの思考こそがこれからの温泉町の景観形成には大事だと思う。

■鈴木　理恵（建築コース）／作品：「福祉専門学校と共生する集合住宅 ―佐世保の傾斜地で寄り添って暮らす―」

【設計要旨】佐世保市は、丘陵地の多いまちである。軍港を支える重工業が発展しはじめたころから、人々の生活の場として丘陵地が開発され、急斜面に張りつくように住宅群が形成されてきた。狭い路地と急な坂道の多い住宅地は、現代的な利便性の悪さから高齢者を家の中に閉じ込め、若い世代を都心へと流出させた。高齢者が多く取り残された斜面住宅地は、地域の交流がほとんどない寂れた風景が広がっている。

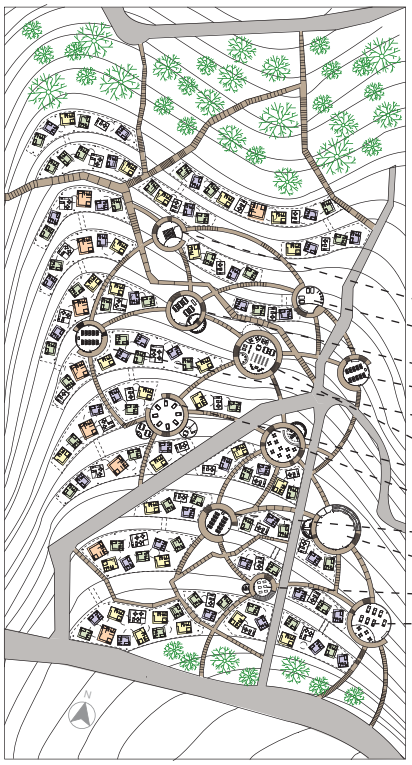

図６：傾斜地で寄り添って暮らす　配置図

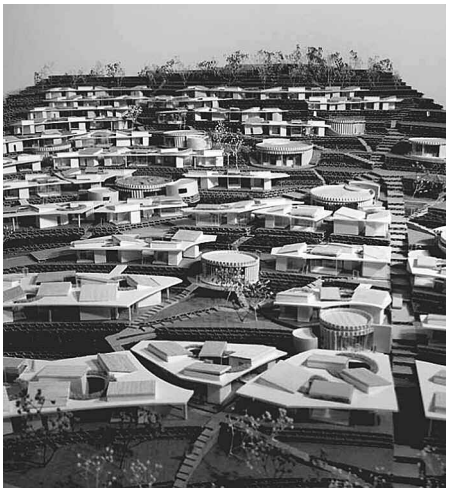

図７：傾斜地に寄り添って暮らす　模型

このような状況を打破して健康的な住宅地に再生するためには、ここに住む人々をサポートできる住宅政策と、若い世代の居住人口を増加させる建築的なアイデアが必要である。

そこで、傾斜地の住宅群を再編した散在型集合住宅と、福祉を学ぶ学生が集う福祉専門学校を組み合わせた複合施設を提案する。また傾斜地上下の住宅群を市民農園で有機的につないでいく。ここでは自分たちが食べる程度の野菜や果物を、交流を深めながら栽培していく。福祉専門学校の校舎は集合住宅群の中に散在させ、カリキュラムは地域体験型学習を主とする。

高齢者と若い学生たちは、ハウスシェアリング感覚の集合住宅に住む。プライバシーを維持しながら、共同の施設を共有する新しい価値観の生活スタイルを持

つ集合住宅である。体が不自由になった高齢者も、住み慣れた土地を離れることなく、自分の力で生き生きと生活する希望が持てる。学生は学校だけでは学びきれない知識や経験を地域の人々と生活をともにしながら習得できる。

建物群は、鉄筋コンクリート＋鉄骨・鉄板＋木造の混構造とする。特に鉄骨・鉄板の施工は、佐世保市の基幹産業である造船工場に依頼して、地場産業の活性化にも貢献できるようにする。

【講評】高齢者が多い傾斜地住宅群の再生は、佐世保市の重要課題のひとつであろう。若い世代の人口を増加できる福祉専門学校と連携することで、活力ある風景を造るという提案は魅力的だ。既存の住宅を再編して、生活の共同化を計った集落型の低層集合住宅を造り、その中に福祉を学ぶ学生の教室と住宅を入れ込む設計構想は、佐世保の人口減少の実態を踏まえたまちづくりのアイデアとして興味深い。建築の施工を造船所などと共同するという提案も、地域景観を形成する原動力となる産業活性化のヒントとなる。社会のために「単に建物を造るのではなく、生活する土地の歴史と人間の幸せを考える」という卒業研究本来の設計作品として清々しい。

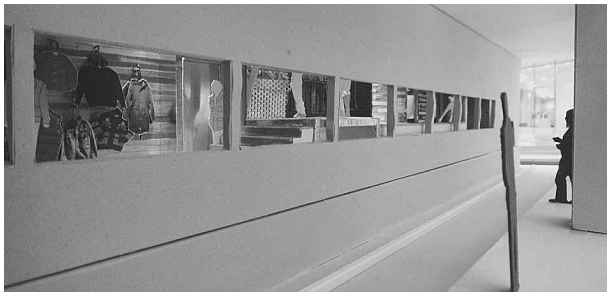

図８：対向プラットホームから見る店舗ウインドー　模型

■武藤　浩平（建築コース）／作品：「駅のホームにつくるアパレル店舗設計」

【設計要旨】我々が買い物を行う際、店の店頭にはＶＰが設置されている。ＶＰは店側のデザインや新商品を宣伝するためにあり、買い物客の購買意欲を促進させる効果がある。しかしショーウインドーに並べられたマネキン達からは、洋服本来の個性や幅といったものが薄い印象を受ける。そこで提案するのが、ＶＰの新しい形を用いたフリージャンルの店舗である。

ひとつのコーディネートしかないマネキンが並べられるのではなく、客自身の試着姿を並べることにする。シューズの棚では試着したシューズだけが見えるように、アウターの棚ではアウターのみが外に映し出されるようにする。これは、動くマネキン達による常に移り変わるコーディネートである。

計画は、駅のプラットホームで行われる。そこは、通勤・通学ラッシュから始まり、多くの人が行き交い、すれ違う場所である。

【講評】アパレル店舗のショーウインドーのあり方を強く意識したデザインの面白さがある。しかし部分的なイメージは良く検討されているが、店舗全体の空間づくりには物足りなさが残る。駅のホームと店舗の関係やウインドウに適用する距離や寸法、色彩計画などをより詳細に検討すれば独特な建築提案となったはず。模型はきれいに出来ていたが、設計意図が伝わるようにもっと駅との関係が表現できていれば、さらにデザインの印象が強まったと思う。

■羽田野　義喜（大学院造形学専攻）／作品：「郊外型集合住宅のデザイン」

【設計要旨】かつて緑が豊富だった福岡市郊外の篠栗町も、近年では、高層ビルやバイパスなどの構築物によって風景が変わり、美しい集落の存在も薄れかけている。そこで、緑と水が豊富で、生き物と人々の生活が共存する小さな町のような郊外型集合住宅を提案することにした。

篠栗町に計画される低層型集合住宅で生活する魅力は、自然を感じ、他者との繋がりに気付く体験が出来ることにある。コンパクト

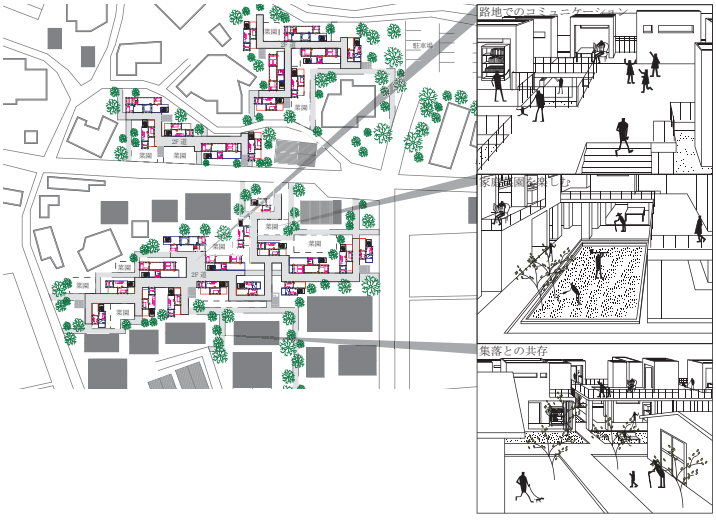

図９：散在集落をイメージした郊外型集合住宅のデザイン

化だけを追求した集合住宅ではなく、集落の住民とともに緑の中で持続再生させる設計思考が重要と考える。

囲まれた住戸単位だけに機能を押し込むのではなく、生活の場面ごとに空間の分散を図ることで、屋外の通路を重要な生活機能要素として扱うことができる。部屋から部屋へ移動するための廊下やベランダは、道に繋いでリビングのように考える。縦横に途切れなくその機能を組み込むことで、路地裏などが立体化される。そうして、集合住宅の道は集落全体へと広がる。周辺住民にとっては緑陰のある裏道の新造となる。また入居者同士や集落の住民との接点となる子供たちの遊びの空間や主婦たちの井戸端会議の「場」も設けていく。

【講評】高齢化、過疎化、投機的な開発などで、伝統的な集落生活が衰退している。その集落に、都市で働く人々の集合住宅を挿入することで、かつての集落が培ってきた生活文化の再生を図って共存させるという設計構想である。入居者は集落の住民に対して持続可能な共存を働きかける仕掛けを用意している。生活機能ごとに空間の分散化を図ることや、屋外通路を路地として扱う手法は空間計画として楽しい。廊下や縁側が路地に開かれ、集落の道に繋がり、子供たちの遊ぶ場所や主婦たちの井戸端会議の場にも繋がるという構成は、伝統的な集落の賑わいの再生を予感させる。伝統的集落の再生を願う現代社会の要望に十分に応えた設計として評価したい。

図10：郊外型集合住宅　模型

■永野　大輔（大学院造形学専攻）／作品：「観光立国にむけたイージーツーリズムの提案ーレンタサイクルシステムと観光ツールのトータルデザインー」

【設計要旨】平成十八年の「観光立国推進基本法」の成立、平成二十年の観光庁の発足等、日本は政府を挙げて観光立国の実現を施策してきた。その結果、日本を訪れる外国人は増加傾向にあり、特に韓国や台湾、中国からの観光客の増加が顕著となった。しかし九州を訪れる彼らの旅行スタイルは、大型バスで福岡市の天神や大分の別府、熊本の阿蘇といった有名観光地を駆け足で回るスポット観光である。この旅行スタイルは、「楽しみ」や「見聞を広める」という旅行本来の目的の達成までには至っていない。これらの目的を果たしてこそ、他国の文化を知り、観光の先にある国際交流につながると考える。

そこで「イージーツーリズム」という、旅行スタイルを確立するためのレンタサイクルネットワークを提案する。これはＪＲ九州の鉄道網に付帯してレンタサイクルネットワークを形成し、鉄道とレンタサイクルの二つのネットワークを利用する。都市間の移動は鉄道で、街に降りたらレンタサイクルに乗って、鉄道や大型バスでは行けないような地域、ガイドブックにも載っていないような場所を、ゆっくりと時間をかけて巡るものである。従って本計画は、以上のようなイージー

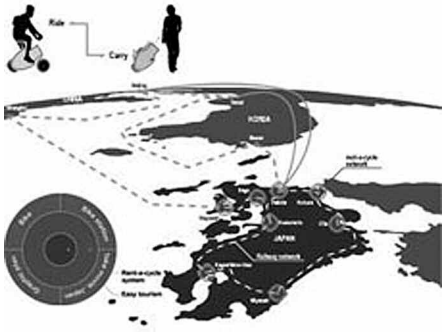

図11：イージーツーリズムの提案

図12：レンタサイクルステーション　ＣＧイメージ

ツーリズムに関連するレンタサイクルシステム、および観光客参加型イベント、レンタサイクルネットワークを形成する自転車貸出ステーション、自転車、それとレンタサイクル専用ストリートサインなどをトータルでデザインするものである。

【講評】観光立国に向けて「自転車革命」を構想するトータルデザインは時宜をえた提案である。鉄道とレンタサイクルを繋ぐコンビネーションデザインは、九州の各地域を時間をかけて巡る独自提案の「イージーツーリズム」の仕掛けとなっている。観光客参加型イベントのデザインも有効だ。自転車とビデオカメラをレンタルして、九州の風景を記録したものをウェブ上の「Take movie, Japan Fes.」に発表して表彰するというプログラムは、情報ネットワークの時代にふさわしい躍動感がある。こうしたアイデアはまちづくりと連動して、滞日国際交流人口を増加させる力となる。この研究がイメージするサイクルスーパーハイウエイの環境整備も近々に計画されていくだろう。

■土佐祐介（大学院造形学専攻）／作品：「タブレット型多機能端末を利用する高等学校のスペースデザイン」

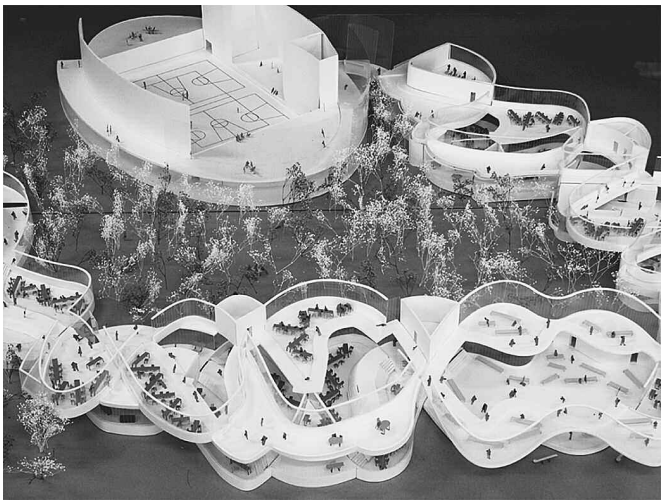

図13：多機能端末を利用する高等学校　吹き抜き模型

【設計要旨】アップルのアイパッドが登場したことによって、高校生の教育学習環境が大きく変わろうとしている。

タブレット型多機能端末は個人が携帯できる学習情報の双方向性に優れている。電子書籍化された教科書を用いる学習や、危険が伴う化学実験等々が画面で学習できる。この端末はこれまでの教室の概念や授業風景を大きく変え、生徒同士や生徒と教師間の情報共有の方法など、教育のありかたを変えていく。

このような情報社会の最先端機器が教育機関に導入されている現代においては、学校のスペースも当然変わっていくべきである。教育体制も、生徒のことを中心に整える必要がある。教師は、授業だけでは教えることのできない教育にも心配りをする必要がある。

高等学校のスペースデザインは、生徒と生徒、生徒と教師の関係を空間造形として表すべきである。生徒には心から高校生活を楽しんでほしい。

【講評】アイパッドの登場は、高校の学習環境を確実に変えるだろうという予測が、研究の動機付けになっている。タブレット型多機能端末の進化は、これまでの高校教室の空間構造や授業の光景を変えるだけでなく、生徒同士や、生徒と教師間のコミュニケーションも変わるはずとする構想には現実性がある。特に、生徒が制作した作品や実技などを発表する授業では、より積極的に活用できよう。提案された設計では、現在の学校の教室と廊下の間の壁を解体して、旧い教室のイメージを払拭している。職員室、校長室、事務室等、形式張った空間も思い切って解体している。結果、緩やかに開かれた学習空間は、大きな中庭を囲い込んで敷地全体を有機的に活用できる新しく自由な環境を創ることに成功している。これまでの高校の空間とは次元を異にする教育環境の楽しさが伝わってくる。

図14：多機能端末を利用する高等学校　吹き抜き模型

図15：2011/02/08アジア美術館の最終発表を終えて